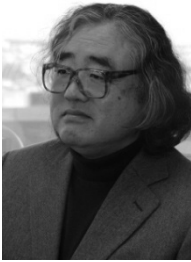


## 随想



林 好 雄

二〇一X年の、五月の連休が明けて、時には汗ばむような陽気の日もあるものの、梅雨入りにはまだしばらく間があるというような頃、私は本間邦雄君とともに、京都市行きの新幹線に乗っていた。前日に、森本和夫先生が生駒の病院に入院していることを知らせてくれる人があって、私はその日、午前中の授業をすませたあと、とにかく病院に行ってみるつもりで、本間君の研究室に電話をしたところ、即座に同道することになったのだ。

本間邦雄君と私は同じ年に同じ大学院の比較文学比較文化専門課程に入院して（大学を出てすぐ新聞社に勤められ、数年後に教師として大学に呼び戻されたという経歴の森本先生は、いつもそう言って私たちをからかった）以来、森本教室の数少ない常連で、いつ知らず三人で酒場に通うことが多くなり、時に怒鳴り合ったり胸倉を掴み合ったりするようなことがあっても、そんなことが四半世紀も続けば、誰の目から見ても紛れもない師弟なのだった。ちなみに私たちの初年度の森本先生の講義のテーマは「空海の『声字実相義』とデリダのエクリチュール」であり、二年目のそれは「道元の『身心学道』とメルロ＝ポンティの身体論」であった。

私と知り合う前に、建築科の学生として京都で暮らしたことのある本間君の土地勘に導かれるがまま、京都で近鉄線に乗りかえて、知らされていた駅で降りると、駅に隣接して、駅と同様に新しい病院の白い建物があった。受付で森本先生が入院していることを確かめると、すぐに病室に向かったが、あいにくリハビリ中ということで、先生のベッドは空だった。リハビリができるくらいなら病状もそう重くはないはずだと一安心して、同じ階の半分食堂で半分面会所のようなところで待つことにした。しばらくして私は小用に立ったついでに、確認のために先生の病室を覗いてみると、車椅子の先生と目が合った。その瞬間、先生の表情が一変して、驚いたような、茫然としたような、不思議な顔つきになった。

私は前に一度その顔を見たことがあった。パリ五区と十三区の境の、サン・マルセル大通りがゴブラン大通りと交差してポール・ロワイヤル大通りとアラゴ大通りに分岐するところに、その三角州のような地形を利用したカフェがあった（今ではアメリカ系のハンバーガーショップになっている）。私たちがパリで定宿にしていたコントルスカルプ広場の近くのパリジアーナがホテルを閉めてから、先生はたいていゴブラン大通りの辺りのホテルに滞在しており、先生より少し贅沢な私は（先生は、いつもそう言って私をからかった）、その年はパンテオンの脇の偉人<sup>グラン・ゾム</sup>ホテルを予約していた。カフェは両者のほぼ中間にあって、五差路に面したカフェのテラスは、風通しも見晴らしもよいので、待ち合わせには絶好の場所だった。

いつものように先に到着していた先生と挨拶もそこそこに、先生と同じビールを注文して、東京とは比べものにならないほど快適なパリの夏の気候のことなど話題にしていると、突然先生の表情が変わって、一点を凝視したまま動かなくなった。<sup>アン・ペルソネル</sup>人間的主体を喪失したような、時間の関節がはずれて、視線が宙吊りにされたような、実に不思議な顔つきだった。

それから私の方をちらりと見て、またもとの方向を見つめ、もう一度私を見て訴えるような目つきをされた。私が渡って来た横断歩道を一足遅れて渡って来た、ソニア・リキエルのサマー・セーター（その年の『ヴォーグ』誌の表紙を飾ったものだ）とサングラス姿の小柄な女性が、私の背後の、私たちから少し離れたテラス席に座ったのだ。

実は私はその夏、大学院の頃から私たちが行きつけの西荻窪の酒房G（今はもうない）の店主を連れてパリに来ていて、そんなこととは夢にも知らない森本先生を驚かせてやろうと企んだのだった。計画は大成功で、ついに我慢しきれなくなった彼女がサングラスを外して近づいてきて真相を明かすと、大笑いとなり、それからパリも東京もないいつものお付き合いになった。先生は私たちが行くところにはどこへでもついてきたし、食事のときには、決まって「きみたちと同じものを」と言った。そして、先生が大学を辞められるまで、そうした夏が何度か繰り返されたが、最後の夏、いつものように大いに飲み大いに食べた後で、別れるとき、先生がふと「ここはどこだ、どうやって帰ればいいんだ」と言ったことが、私たちが飲んだ葡萄酒の滓のように、妙に記憶の底に残った。

病室の先生と目が合ったものの、本間君を放っておくわけにもいかないので、いったん本間君を呼びに行って、再び病室に戻ると、先生はベッドに寝ていた。奈良での生活のこと、入院のいきさつなど、私たちの質問にぼつりぼつりと答える口調

は先生のいつものものだったが、いつもと違うのは、話が終わると、まるで私たちがそこにはいないかのように、仰向けにじっと宙を見つめるような姿勢に戻ってしまうことだった。人によっては分からない人もいるという話を聞かされていたので、私は愚かにも「先生、僕のことが分かりますか」と聞いてみた。すると先生は、「きみのことは分かるよ」と言って、いつも酒の席ですのような、片目を半分瞑って微笑むような仕草をすると、向き直って、再び前方の虚空を見つめるのだった。私は自分の愚かさをどれほど悔やんだことか。

私は、一九九〇年四月、森本先生の推薦によって、駿河台大学経済学部の特任講師となり、ほぼ四半世紀にわたって、主としてフランス語を教えながら、幾編かの論文を書き、何冊かの翻訳書を出し、二〇一四年三月、森本先生のいない駿河台大学を去ることになった。